ひとはく研究員だより

地域の魅力見直しまち再生を

福本優研究員

「ニュータウン再生」という言葉、どこかで耳にしたことがある人もいるのではないでしょうか？ ニュータウンは誕生から40年を超えるものもあり、さまざまな課題が顕在化しています。

ニュータウン再生では、住民が気軽に集える場づくりや、団地のリノベーション等で成果を生んでいます。一方で、ニュータウン開発の周辺にある集落に目を向けると「子が就職し農地の後継者がいない」「高齢化が進み自治会が機能しない」など同様に課題を抱えており、こちらもまたさまざまな手法で集落再生が行われています。しかし、どちらも持続的な「まち」への再生とは言いがたく、ニュータウンと集落への個別の地域再生策だけでは限界がある地域が多いのです。

そこで、改めて地域のストック（資産・魅力）を見直すと、まちの再生へのヒントが見つけられます。例えば、写真は三田市の深田地区にある熊野神社のお祭りの様子です。ニュータウン開発当時に集落側から声をかけ、地元の祭りにニュータウン新規入居者も参加できる仕組みをつくり、現在まで維持しているのです。

集落とニュータウンのみこしが並ぶ祭り
＝熊野神社

三田市には他にも同じようにニュータウンと集落が連携できる仕組みを持つ地域があります。これは意外とまれで、40年近くも育んできた地域のストックなのです。人口減少社会となり、暮らす場が都心へと戻る現象が進んでいる現在では、今一度、郊外に暮らす価値が求められています。

ニュータウン再生とは開発当時の姿に戻すのではなく、次の時代に合わせた形への再編が必要なのです。これは周囲の集落も同様です。農地や里山など地域の自然と共生した暮らし、その暮らしと結びついた文化は、郊外の魅力的なストックであり、これらを生かし、集落とニュータウンが混ざり合う地域の形を考える必要があるのです。

情報技術やエネルギー技術の革命的な進化は、世界の都市を変化させようとしています。図らずも、新型コロナ禍での暮らしはこの変化を私たちに突き付けています。都市に通うことを前提とした郊外ではなく、集落とニュータウンが混ざり合い、郊外の魅力的なストックを持続的なまちとして形づくるための都市空間やシステム、暮らしの形についての研究が必要だと考えています。

テレワークや外出自粛で、自宅や地域で過ごす時間が増えていると思います。改めて地域のストックを見つめて、自分のまちを楽しんでみてはいかがでしょうか？ それが、都市のカタチを変化させる一歩目なのだと思います。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。